詩編４８編の黙想（2021 年 5 月 5 日の祈祷会を踏まえて松見俊）

主なる神は砦の塔：慈しみと義と公正な審判者

まず、詩編 48 編を朗読してみよう。「神の都にある聖なる山」（２節）とある。エルサレム神殿はシオンの山々の上に立つ難攻不落の城塞都市の中にある。エルサレムは神の都であり、聖なる山である。ある意味で理想化されたヴィジョンであろう。城壁、都は城郭、砦の塔に囲まれ民衆を護ってくれる。たとえ諸国の王たちが攻め上ってきても彼らはエルサレルを陥落させることはできない（5－8 節)。私たちはその中に守られていることを黙想してみよう。主なる神（gādōwl Yahweh）が自ら大いなる主なる神であることを示される。主は彼女（都市は女性名詞）の砦の塔（ləmiśgāb, 避難所、隠れ家）である。万軍の主（Yahweh səbāōwt）がこの都を堅く立てられる(9 節)。現在、日本では城巡り（歴女？）が流行しているようである。日本社会は、世々の常である「分断して統治せよ」の政策によって、個々人は、孤立化し、無防備で一人で苦しみ悶えて生きているという実感がある。この中で、堅固な城壁に護られていること、そこに仲間たちがおり、主なる神がおられることに信頼することが求められている。私たちは独りではない。

１．「慈しみ」、「正しさ」、「裁き」がそこにある

エルサレムの神殿、城壁は堅固な城郭や塔に守られているだけではなく、そこには聖書のキーワードである、主なる神の「慈しみ」(hasdekā, 10 節)、「正しさ」(sedeq,11 節)、神の審き・公正（mišpātekā, 12 節）が支配している。この３つの事柄が危うくなるとき、人は息苦しくなり、生きることができない。あるいは「慈しみ」と「義」が「公正な審き」において現れる。「見えるものは、見えざるものの鏡」である（メイズ）ばかりか、見えざるものは、見えるものにおいてかたちを取らねばならないのではないだろうか。

２．信仰者の応答　賛美、喜び祝う、喜び躍る

主なる神の慈しみと義と公正（正しい審き）に対する信仰者の応答は、賛美であり、喜び祝うことであり、喜び躍ることである。寂しく、苦しい中で賛美、喜びが私たちを覆うように！

３．主なる神とその業を見上げること

主なる神とその業を見ること（9 節 rāʻînū、13 節)、思い描くこと（考え見た dimmînū,10 節）が求められる。自分自身の弱さを見るのではなく、覆いつぶすような諸問題だけを見るのでなく、神の護りである城壁に心を向け、城郭に分け入って見よ(辺りを歩いて、彼女の周りに行き巡れ、一巡りしてみよ（sōbbū, wəhaqqîpūhā)。この詩編は２５００年歌われ、祈られてきた。慈しみと義と公平な審判はイエス・キリストにおいて成就した。キリスト・イエスに愛され、救い出されていることに目を向けるよう。

４．信仰者の使命

エルサレムの塔である主は、イスラエルの民を護り、イスラエルを喜ばせるだけではなく、全地の喜びである（3 節)。過去の救いの出来事（私たちにはキリストの出来事）を記憶し、主の救いを「後の世に語り伝えること（təsappərū,　You may tell)」が信仰者の使命である。

５．約束

この神は世々限りなく、死を超えて(‘al mūt even to or over death 死に至るまでとも翻訳できる)、わたしたちを導いて行かれる(yənahăgēnū hū, He will be our guide 15 節)。ヘブライ語では、彼こそとこしえに、私たちのガイドであろう。なんと豊かな約束であろうか！